

The Bend in the Road

"I'm just as ambitious as ever. Only, I've changed the object of my ambitions. I'm going to be a good teacher – and I'm going to save your eyesight. Besides, I mean to study at home here and take a little college course all by myself. Oh, I've dozens of plans, Marilla. I've been thinking them out for a week. I shall give life here my best, and I believe it will give its best to me in return. When I left Queen's, my future seemed to stretch out before me like a straight road. I thought I could see along it for many a milestone. Now there is a bend in it. I don't know what lies around the bend, but I'm going to believe that the best does. It has a fascination of its own, that bend, Marilla. I wonder how the road beyond it goes – what there is of green glory and soft, checkered light and shadows – what new landscapes – what new beauties – what curves and hills and valleys further on."

"I don't feel as if I ought to let you give it up," said Marilla, referring to the scholarship.

"But you can't prevent me. I'm sixteen and a half, 'obstinate as a mule,' as Mrs. Lynde once told me," laughed Anne. "Oh, Marilla, don't you go pitying me. I don't like to be pitied, and there is no need for it. I'm heart glad over the very thought of staying at dear Green Gables. Nobody could love it as you and I do – so we must keep it."

When it became noised abroad in Avonlea that Anne Shirley had given up the idea of going to college and intended to stay home and teach there was a good deal of discussion over it. Most of the good folks, not knowing about Marilla's eyes, thought she was foolish. Mrs. Allan did not. She told Anne so in approving words that brought tears of pleasure to the girl's eyes. Neither did good Mrs. Lynde. She came up one evening and found Anne and Marilla sitting at the front door in the warm, scented summer dusk. They liked to sit there when the twilight came down and the white moths flew about in the garden and the odor of mint filled the dewy air.

Anne sat long at her window that night companioned by a glad content. The wind purred softly in the cherry boughs, and the mint breaths came up to her. The stars twinkled over the pointed firs in the hollow and Diana's light gleamed through the old gap.

Anne's horizons had closed in since the night she had sat there after coming home from Queen's; but if the path set before her feet was to be narrow she knew that flowers of quiet happiness would bloom along it. The joys of sincere work and worthy aspiration and congenial friendship were to be hers; nothing could rob her of her birthright of fancy or her ideal world of dreams. And there was always the bend in the road!

"God's in his heaven, all's right with the world," whispered Anne softly.

(Excerpted from Chapter 38, *Anne of Green Gables*)

第10回 高校生英語スピーチコンテスト

テーマ 「夢 - Ambition - 」

道の曲り角

「いままでどおり夢はあるわ。ただ夢のあり方が変わったのよ。いい先生になろうと思っているのーそしてマリラの視力¹を守っていくのよ。それに家で勉強は続けて、独学で大学の課程を取ってみようと思っているの。ああ、いろいろなことを計画しているのよ、マリラ。この一週間ずっと考えていたの。ここで精一杯やってみるつもりよ。そうすればきっと最高のものが返ってくるはずよ。あたしがクイーン²を出てくるときには、自分の未来はまっすぐにのびた道のように思えたのよ。いつもさきまで、ずっと見とおせる気がしたの。ところがいま曲り角にきたのよ。曲り角をまがったさきになにがあるのかは、わからないの。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの。それにはまた、そのすてきによいところがあると思うわ。その道がどんなふうのにびているかわからないけれど、どんな光と影があるのかーどんな景色がひろがっているのかーどんな新しい美しさや曲り角や、丘や谷が、そのさきにあるのか、それはわからないの」

「あんたにあきらめてもらうのはいけないような気がするんだけどね」マリラは奨学金³のことを持ち出して言った。

「もうあたしを止めようとしても無駄よ。あたしはもう十六歳と半年になるの。てこでも動かない頑固者よ。リンドの小母さんにも言われたことがあるけれど」アンは笑った。「おお、マリラ、あたしを憐れんだりしないでね。気の毒だなんて思われるのは好きじゃないし、そんな必要もないわ。大好きなグリーン・ゲイブルスにいられると思っただけで、うれしくてたまらないのよ。⁴マリラとあたしほど、ここを愛している人はいないわーだから大切に守っていきましょう」

アンが大学に行くのをやめて、家に残り、学校で教えるつもりだということがアヴォンリーじゅうにたちまちひろがる⁵と、様々な議論がわき起こった。大方の善良な人々は、マリラの目のことを知らないの、アンは愚かな選択をしたと口々に噂した。しかしアラン夫人⁶はちがった。よく決心したものだと褒めてくれたので、アンの目からは思わず喜びの涙がこぼれた。世話好きなリンド夫人⁷も賛成してくれた。ある晩、アンとマリラが、あたたかく香しい夏の薄暗がりにもまれて、玄関先にすわっているところへ夫人が現れた。二人は、白い蛾が庭に舞い、露気を帯びた空気にハッカの香りが漂うたそがれ時に、そこに腰をおろすのが好きだった。

アンはその夜、満足することの幸福をしみじみ味わった。桜の枝を風が静かにわたり、ハッカの香がただよってきた。星は窪地の樅の上でまたたき、木の間からダイアナの窓の灯が輝いていた。

アンの地平線はクイーンから帰ってきた夜を境としてせばめられた。しかし道がせばめられたとはいえ、アンは静かな幸福の花が、その道にずっと咲きみだれていることを知っていた。真剣な仕事と、りっぱな抱負と、厚い友情はアンのものだった。何ものもアンが生まれつきもっている空想と、夢の国を奪うことはできないのだった。そして、道にはつねに曲り角があるのだ。

「神は天にあり、世はすべてよし」⁸とアンはそっとささやいた。

暗誦部門の題材について

今年度の高校生英語スピーチコンテストでは、「夢 –Ambition–」をテーマとして掲げました。そして、暗誦を通してこのテーマを表現していただくために、ルーシー・モード・モンゴメリ作 *Anne of Green Gables* の最終章より「道の曲り角」を題材として選定しました。日本語訳は『赤毛のアン』を初めて日本に紹介した翻訳家 村岡花子の訳を採用しました。主人公アンが抱く **ambition** と同様、昭和初期に翻訳家、小説家として活躍した村岡花子の **ambition** にも思いを馳せていただければ幸いです。モンゴメリの原作は 100 年以上前に書かれたもので、現代の英語ではあまり使われない表現も含まれていますが、今回の題材は原作を忠実に抜粋しました。わかりにくい箇所については、以下の注釈をご参考ください。

- 1 16 歳になったアンは、マシュウの突然の死に直面し、深い悲しみの中にいた。長年マシュウと二人でグリーン・ゲイブルスの農場を守ってきたマリラは、目に負担がかかる仕事を一切やめなければ半年以内に失明してしまう、という眼科医の診断を受けていた。
- 2 アヴォンリーの小学校を卒業したアンは、マシュウ、マリラの元から離れてクイーン学院に進学した。アンは 1 年間熱心に勉強し、主席でクイーン学院を卒業した。
- 3 成績優秀者に送られるエイヴリー奨学金を勝ち取ったアンは、クイーン学院卒業後はレッドモンド大学に進学することになっていた。マリラは、自分のためにアンが大学進学をあきらめようとしていることを気にしていた。
- 4 I'm heart glad over the very thought... 村岡訳では「～と思っただけで、うれしくてたまらないのよ」とされている。'heart glad'は、アン独特の言い回しである。
- 5 it became noised abroad... 村岡訳では「たちまちひろがる」と訳されている。松本(1993)によると、'noise abroad' は新訳聖書「ルカによる福音書」第 1 章 65 節が出典である。古風な表現であるが、暗誦の題材としては原作通りの表現を使った。
- 6 アンが尊敬する牧師夫人。アヴォンリーの教会に着任した新婚の牧師夫妻をアンは心から慕っていた。
- 7 グリーン・ゲイブルスの近くに住むリンド家の夫人。おしゃべりで世話好き。マリラのよき理解者である。
- 8 God's in his heaven, all's right with the world. イギリスの詩人 ロバード・ブラウニングの詩から引用されたもの。

参考文献

L・M・モンゴメリ『赤毛のアン』松本侑子訳、集英社、1993 年